

北条のこと

バスにぼんやりと座っていたら、「あの、北条ほうじょうさんですか」と言われた。今のバス停で乗ってきたよ
うだが、見ると知らない女だ。それとも、どこかで会ったことがあるのだろうか。あるのかもしれない
が、少なくとも記憶には残っていない。だいたい、俺の名前は北条じゃない。

「——俺ですか。いや、違います」

俺はなるべく誠実そうに否定の返事をしたが、その声には、苦笑の色が混ざってしまっただと思う。女
は申し訳なきように、そうですね、すみませんと言って俺から遠い席に座った。俺のことを、ちよつ
と感じの悪い奴だと思っただろう。しかし俺からすれば、苦笑したくなるのももつともだ、と言わせ
てもらいたい。なにしろ、この信州しんしゅう松本まつもとに転勤してきて二年で、もうその「北条さんですか」という
問いを何度聞いて、何度違いますと答えたかわからない。

俺は気を取り直して窓の外を眺めた。

バスは、十九号線をもう南^{みなみまつもと}松本のあたりまで来ていた。急ぐわけでもなく、信号で止まり、バス停で止まりしながら走る。俺はぼんやりしてきた。適度に暖かい車内で日に当たりながら、バスの震動にゆらゆら揺すられているんだから眠いわけだ。赤ん坊だって、暖かくて揺すられていれば眠る。日ごろ揺すられる機会なんてない大人ならなおさらだ。まぶたが閉じかけるのを感じながら、俺は考え事をしていた。なぜこんなに、北条さんですかなんて言われるんだろう。

もし人違いなのだとすれば、本当の北条さんというのがいるんだろう。そして、おそらく風貌か何か、かなり俺に似ているということだ。風貌——あるいは、似ているのは顔ではなくて、持ち物や服装なのかもしれない。特定の鞆なり靴なりを身に着けてる時に限って言われるというわけではないような気がするけれど、正確に憶えているわけじゃないからわからない。ただ、いずれにしても少なくとも年齢好くらしいは俺と合っているんだろう。つまり、その北条さんっていうのはこの俺みたいな、三十代半ばでちよつと大きめの男ということになる。

自分に置き換えて考えてみよう。バスの中や、このあいだはショッピングセンター、ほかにも駅前で信号を待っている時とか、そういう機会に「北条さんですか」なんて話しかけるのは、どんな場合だろうって。しかも、だいたい「あつ、北条さん久しぶり」とか言うんじゃないんだ。「もしかして、北条さんですか」とかそんな感じに話しかけて、俺が違うって言うのと、「そうですよね、失礼しました」なんて謝ってその場を離れてしまうんだ。

俺と瓜二つの北条っていう男がこの松本にはいて、よく間違えられる、ただ単にそれだけのことなのかも知れないとは思った。でも、そんな風に知り合いに似てる人を見かけて、しかも本人かどうか確認が持てないとき、普通わざわざ話しかけて確かめたりするんだろうか？ 話しかけてきている人たちもおそらくその北条とすぐく親しいっていうわけじゃないだろう。そんな間柄なのに、わざわざ話しかけるのはどういふことなんだろうか。

北条さんですかって言うとき、少し驚いたようにする人が多いとも思う。えっ、こんなところに北条さんがいるなんて、というような顔をするんだ。だとすると、その北条はたとえば失踪したとか、そうでなくてもたとえば東京や海外に行ったとかで、この松本でバスに乗ってたりするはずのない人間ということなんだろう。しかも、たとえば死んだ人のように、ほんとうにどうやってもここにいるはずのない人間なら、さすがによく似た男を見たからって話しかけたりはしない。だとすると、ある程度戻ってくる見込みはあったということになる。

そういうえば、北条さんですかって聞いてくるのは男も女も、大体俺と同じくらいの年だ。だとすれば、このあたりの高校の同級生とか、何かそういうことなんだろうか。もちろん、この松本に引越してくる前は、千葉でもその前の鳥取でも、一度だつて北条さんなんて呼ばれたことはない。俺はこの土地に縁がないからわからないが、俺とちょうど同じくらいの年代で、失踪した北条っていう奴がいるのかもしれない。高校だとすれば、二十年前くらいか。その頃に姿を消した北条。

景色はだんだん畑が多くなってきた。そろそろ塩尻市しほじりに入るんだらうか。こうやって一人でバスに乗っている時には、あてのない考え事をするのがちようどいい。今までも、北条さんですかって聞かれた時にはいろいろな気になっていたけれど、何か用事をしている途中だったり、人と会っているときだったりして、いつの間にか忘れていたんだ。

実は、北条という名前には一つだけ心当たりがある。心当たりどころか、とても忘れられない名前だ。俺にとつて北条といえば、中学と高校で一緒のクラスだったあの可愛い北条のことだ。彼は美少年ではなかったけれど、顔の整った可愛い少年だった。身長は平均より少し低く、肩幅や体の線が細くて、それでいてちよつとやわらかい肉付きをしていたから、初めて会う人には女と間違えられることもあった。そんなとき北条は、あいまいな返答をしながらも、まんざらでもないという顔をしていた。彼はそういう可愛い少年でい続けるために、髪型とか服装とか、肌の手入れとか、できる範囲で努力していたのを知ってる。

そして北条はいわゆるホモで、俺に男として好意を持っていたし、俺もそのことを知っていて、しかも俺が気づいてるっていうことを北条は知っていた。(俺たちの仲間は大体知っていた。)ただし、俺が男の恋人を作るつもりなんてないことも北条はよく知っていたし、そういうふうにならなりたい男なんてまれだつていうことも十分わかつていた。だから、俺と一緒に出かけたり休日に二人で遊んだりしたけれど、決してそんな恋人めいた空気になることはなかったし、北条はそんな空気を作ろうとすることもなかった。おそらく、いろいろ言いたいのを我慢していたんだらうと思う。可哀相という気は

していたけれど、だからといって憐憫で付き合うなんていうのは嘘だ。男だとか女だとかいうことにかかわらず、そういうことはすべきじゃないって思ってる。

可愛いし賢くて一緒にいて楽しいものだからなく北条に私も悪い気はしなくなっていたけれど三年生の冬、北条と二人でいい感じになっても手を出さなかったのを最後に結局二人はそれぞれの道に分かれる。

結局普通に大学で女を知り何人めかの彼女と結婚した。あるとき北条の好意を受け入れたらどうなっていたのだろう。それでも結局私は女と結ばれるのだろうけれどあの冬を可愛い北条と過ごしていたらと想像すると胸が痛い。

私が間違えられる北条さんは、もしかしてあの北条と何か関係があるのだろうか。等々とまた少し考える。

そうしているうちに、バスは空港に着いた。もし次に北条さんですかと問われたら、逆に北条さんとはどういう人ですか、なぜあなたは北条さんに似た私に声をかけるのですかと尋ねようと思っていたのだけれど、結局北条さんについてはわからないままになってしまった。

次の任地は札幌さっぽろ。先に引越している妻子を追って北へ飛べば、もう北条さんですかなどと呼び止められることもないだろう。